

「世論」のコンセプト

——東西におけるその歴史と問題点——

中 田 佳 昭

はじめに

『文藝春秋』7月号の日仏対論「日本で一番強いのは誰か」において、堺屋太一氏は仏「フィガロ」誌の質問に対する答えとして、「日本をコントロールしているのは、実は世論である」と述べている。⁽¹⁾民主主義とは世論に基づく政治である、とする一般的定義に従えば、今日の日本のこうした政治、社会の現状は一見理想的状態にあるとも見える。事実、リクルート事件から消費税に至るこの一、二年国内を揺がし続けた諸問題の成り行きにおいて、世論がいかに大きな役割を果たしたかはなお人々の記憶に新しい。これら一連の事件において、時に狙撃をきわめたとも思われる世論の力に、ターゲットとなった仮想権力者達がたじろぐ様を見て、積年の溜飲を下げたと感じた一般大衆は少なくなかったはずである。

しかしまた一方には、パスカルの言葉をかりれば「社会の女王」として斯様に猛威を振るう世論こそが、むしろ政治や社会の混乱を助長するものとして、日本の今日の状況を憂う声が存在しないわけではない。たとえば、このところ一貫して日本のマスコミ・世論に対して論陣をはり、そのありように警告を発し続けている西部邁氏は『中央公論』6月号において次のように述べている。

政治技術としての民主主義がすっかり定着した日本の現段階にあっては、世論が立法、司法、行政のあり方を大きく左右する。それら既存の三権は世論の動向に身を合わせべく汲々としているといってけっして過言ではない。そうならば、世論を操作する、あるいは操作するといわないまでもそれに甚大な影響を与える勢力があるとすると、その勢力こそが第一権力、あるいは基礎権力となるのである。……第一権力はマスコミ・世論に他ならない。⁽²⁾

西部氏は、本来反権力を旨とするはずのマスコミが、その反権力の衣装と民主主義という錦の御旗のもとに大衆世論を誘導し、自らが立法・司法・行政を支配する第一権力として君臨し、社会秩序の基盤の破壊と混乱の助長に走るさまを、日本の現状のうちに指摘している。勿論、世論とマスコミとは同一ではないが、一般国民が世論を形成するに際していかなる意見、判断に依拠したかといえ、それは疑いもなくマスコミのそれということになるであろう。そして問題はこうして不可分に形成されるに至ったマスコミ・世論が、日本の現状においては必ずしも、その健全なあり様を示していないということなのである。反権力をきどる

権力として覇権に驕り浮かれるマスコミと、それに同調するかの如くに、あて所もなく浮遊する世論の現状とに、民主主義の退廃と衆愚政治への転落を危惧する声も少なくはないのである。

民主主義の根底を支える世論が、また民主主義の基盤を危うくしているのではないかという日本の現状はひとつの逆説である。こうした状況は民主主義がひとつの爛熟状態に達した結果ともとれるが、もとをただせば、大衆世論の専横が衆愚政治に墜する危険性は、最初から民主主義それ自体のうちに胚胎していたものともいえる。しかし、また一方において、なお人々の記憶に新しい一例をとれば、我々は昨年暮から今年にかけて東欧を吹き荒れた一連の民主的改革において、市民の世論がいかに大きな役割を果たしたかを知っている。中国天安門事件との比較においても、西欧民主主義の歴史的経験を持つ市民一般の強力な世論の後押しがなかったならば、世界の耳目を集めた東欧のこの民主的改革の車輪が、再びもとの坂を転げ落ちなかったとは誰も保証の限りではない。

すでに明らかなように世論とは、いわば民主主義における両刃の剣である。一体世論とは何か。それはいつどのようにして生まれ、いかなる成長をとげたのか。本稿の目的は東西における「世論」という言葉の歴史をたどりながら、かく形成されるに至った「世論」の概念が、日本及び西洋においていかに理解され、またそれがどのような問題を提起しているかを考察しようとするものである。

1. 西欧における「世論」の誕生

今日の社会において世論がいかに大きな力をもっているかは、「はじめに」において見た如くである。特に民主主義の社会においては、世論が政治のあり方を左右することもしばしばであり、その主権者たる市民の民意をとらえ、それをいかにして施政に反映させるかは為政の要諦といっても過言ではない。さらにこれに情報化社会、国際化時代という今日状況考慮に入れば、国内外の多様かつ重要な諸問題に関して、国内及び国際世論の果たす役割はますますその重要性を増しているとも言いうるであろう。

大衆の意見、庶民の声ということに関しては、西欧には古くから *Vox populi, vox Dei* というラテン語の諺がある。朝日新聞の「天声人語」の英語版のコラムのタイトルにも付されているこの表現の意味は「民の声は神の声」であり、ここから我々はヨーロッパにおいて古くから、政治に「民の声」を反映させることの重要性が認識されていたことを知ることができる。同様の例は東洋、中国の古典にも見える。「民の口を防ぐは、水を防ぐより甚だし」(『史記』)。この直接的意味は「民の口をふさぐのは、川の水をせき止めるよりも危険である」というものであるが、これもまた、政治は「民の声」をよく聴いて行なうべきだという為政者の心得べき知恵が、こうした表現に結実したものと見ることができる。

こうして「民の声」の尊重とその政治への反映は東西において古くから人々に留意され、歴史の知恵として現在に伝えられていることが了解されるのだが、では一体この「民の声」

と、今日言うところの「世論」とは同じものなのであろうか。また異なるとすれば、それはいかなる関係にあるのか。結論的に言えば「民の声」は歴史的過程をへて「世論」へと形成されたのである。

「世論」の誕生を明らかにする前に、西欧諸語における「世論」の語源的側面に触れておくのが便利であろう。「世論」に相当する英語は public opinion, フランス語では opinion publique である。語源的に public (publique) は、ラテン語の pubes (=adult) と populus (=people) に、また opinion はラテン語の動詞 opinari (=think; believe) に由来し、public opinion は文字通り「人々、大衆の意見・考え」という意味になる。ドイツ語の「世論」は öffentlich Meinung であるが、これも個々には öffentlich は open; public、Meinung は opinion; view といった意味であることから、トータルには「開かれた、一般大衆の考え・意見」がその原義ということになる。

そしてヨーロッパにおいてこの「世論」が誕生したのは、ようやく18世紀に至ってからのことであった。勿論 Vox populi, vox Dei の例にも見たように、それ以前にも社会の為政者や指導者が庶民の声を傾聴したり、またそうすることの必要性を主張するということがなかったわけではない。たとえばプラトンやアリストテレスにも世論に近い概念は見られるし、また、ルネッサンス期興味深いことに『君主論』の著者として名高く、権謀術数主義者を意味する英語マキャベリアン (=Machiavellian) の語源ともなったマキャベリは、「君主は大衆の意見を無視すべきではない」とも述べている。さらにまた、17世紀のフランスの哲学者パスカル代表作『パンセ』の中には世論に関して、「世論はこの世の女王であり、力が世論を形成する」といった趣旨の記述を認めることができる。

にもかかわらず、我々は政治・社会の重要な諸問題を左右する力としての世論が、社会的権威を獲得するまでには18～19世紀を待たねばならなかった。この時期、西欧先進諸国においてはようやく中世・封建体制が終焉をむかえ、新たに産業革命による経済力と、合理主義・自由主義により啓蒙された知識とを兼ね備えたブルジョア階級が、近代市民社会を成立させつつあった。こうした経緯の中で「世論」の誕生に大きな役割を果たしたもののひとつとして、忘れてはならないものに印刷技術の急速な発展がある。15世紀ドイツのグーテンベルグの手に成るといわれる金属活版印刷術の発明は、アラビア人が伝えた製紙法とともに印刷物・書物を安価かつ多量に普及させ、一部の為政者・聖職者・学者だけに限られていた知識を一般大衆に開放し、政治・経済・社会・思想の重要な諸問題に関する「世論」の形成を加速する上で重要なファクターとなった。かくして封建体制の崩壊に臨んで、自由と知識とによって得られた、自らが社会の主権者であり、その意見が社会を支えるという市民的自覚のもとに、抑圧された「民の声」は民意の表現としての「世論」へと形成されていったのである。

西欧先進国において初めて「世論」 (=opinion publique) という言葉を使用したのは、ルソーだとされている。ルソーは『社会契約論』(1762) 第4編—第7章「監察官制度」において、常に全体の利益を志向する主権者たる市民共通の意志を「一般意志」 (=volonté général)

と規定し、理想とされる国家においてはこの一般意志の表明が「世論」(=*opinion populaire* または *opinion publique*) であり、その意味で「世論は一種の法である」といった趣旨のことを述べている。西欧市民社会成立のための論理的基盤を提供し、民主主義的政治学の古典ともなったこの書物において、ルソーが新たな概念としての「世論」を提示したのは極めて興味深い事実といえる。しかしまた、我々はここでただちに「民主主義の父」といわれるルソーが別の場所で、「世論」について次のように述べているのを付け加えておかなければならない。

こんなにもさまざまな情念の渦中から、わたしは世論が揺るぎない王座を築き上げてゆくを見る。そして愚かな人間どもは、その支配に屈して、自分自身の存在を、ただ他人の判断のうえにしか打ち立てようとしなくなるのである。⁽⁴⁾

ともかくもこうしてルソーが生命を与えた「世論」の概念を、一般的な意味で次の世に広めたのは、ルイ16世の財務長官J.ネッケルであった。ネッケルはフランス革命後の逼迫した国家財政を建て直すための公債政策についての世論の動向を知るために、多くの識者を招き、その意見を求めたといわれている。ネッケルが直接必要としたのは、特に公債を購入するのに十分なる財力を持ったブルジョア階級の意見としての世論であったが、ともかくも政策立案に世論を視野に入れたという点においては画期的なものであった。ネッケルは繰り返し世論について言及し「いたる所に世論が増大しつつある」とも、また「世論は人間の作るいっさいの制度を強めもし、弱めもする」とも述べている。

このようにして18～19世紀、市民社会の成立とともに市民権を獲得した「世論」は、フランス、イギリスから徐々に世界へと広がっていった。「世論」が生まれつつあったルイ15世時代(1715～74)のバリについて、クセジュ文庫『啓蒙時代』には次のように記されている。「そのサロンにおいて、新たな専制君主——《世論》が、念入りに作り上げられていた。この君主から逃れようとするものは滑稽にみえた」⁽⁵⁾。この新たな専制君主「世論」は急速な成長を遂げ、19世紀初頭には皇帝ナポレオン(1769～1821)をして次のように言わしめるに至っている。「世論は君主がたえず気を配らなければならない温度計のようなものである」。また「私には100万の銃剣よりも、3枚の新聞の方がはるかに恐ろしい」。ナポレオンのこうした言葉からはこの時代における「世論」台頭の勢いのほどが想像される。

2. 「輿論」と「世論」

日本の「世論」について、ヨロンかセロンかが時に問題とされながらも、一般には疑問はそのまま疑問として放置される場合が多い。結論から言えば「世論」はヨロンと読むのが今日の趨勢であるが、そこに至った背景にはいささか屈折した言葉の歴史がある。一体「世論」はいかにしてヨロンとなったのか、その経緯をたどることは、また日本における「世論」誕

生の歴史を明らかにすることでもある。

日本においては「世論」は比較的最近に至るまで「輿論」であった。輿論の「輿」は音読で「ヨ」、訓読では「コシ」であり、その漢語としての原義は「四方から手（𨔵）で車を持ち上げる」というところから、「車、特にその人や者を乗せて運ぶ部分」を意味していた。中国古代の字書『説文解字』には「輿は車輿なり」と説明されている。「輿」が今日なお例えば祭りの「御神輿」や、結婚にさいしての「輿入する」、「玉の輿に乗る」といった表現の中に使用されているのは周知のことである。

そしてこの「輿」には、その前後に大勢の従者、衆臣がつき従うところから、後に「多数の；もろもろの」といった意味の転義が付け加えられるようになったものと推測される。中国の古い字書には「輿は多なり」（『廣雅』）とも、「輿は衆なり」（『集韻』）とも説明されている。「輿論」の「輿」はこの転義によるものであり、ここに「多数の、世間一般の人々の見解・意見」という「輿論」の今日的意味が由来するものと考えられる。中国・明の『古今類書纂要』は「輿論、輿は衆なり。衆人の議論をいうなり」と説明している。

では日本においてこの「輿論」はいつごろ生まれ、また言葉としてどのような歴史をたどったのか。司馬遼太郎氏は『歴史の中の日本』において「世論」の誕生について次のように記している。

彼は近世日本が最初に経験したヨーロッパ列強との国交問題という民族的大課題を処理するのに、じつに単純な方法をとった。日本史上最初に出現した「国民的世論」というものにおそれをなし、それに対し反射的に考えたことは日本国家の運命よりも徳川家一軒の運命であった。これがために「国民的世論」を徳川政治史上最大の権力をもって弾圧した。言論のカケラをも見のがさなかった。⁽⁶⁾

引用は特に井伊直弼の行なった「安政ノ大獄」について述べたものであるが、事実幕末は攘夷論、開国論、公武合体論等日本の歴史において初めて「世論」の出現を見、それがなんらかの形で政治を左右する力を持ち始めた時期であった。「世論」の台頭を別の資料に求めれば例えば福沢諭吉は『福翁自伝』において；

当時日本国中の輿論はすべて攘夷で……徳川幕府ばかりが開国論のように聞こえもするようでありますけれども……天下随一の攘夷藩、西洋嫌いは徳川であると言っても間違いはあるまい。⁽⁷⁾

また『幕末外交談』において田辺太一は；

一人唱えて百人これれに和したので、時勢を知る少数はこれに抗することができず一、二年の間に攘夷の説が国内に蔓延して、ほとんど天下の輿論となるにいたった。⁽⁸⁾

いずれの引用も後年明治30年代の回顧録によるものではあるが、幕末当時の「輿論」形成の実情を知る上で興味深い。ヨーロッパにおいて封建制度の崩壊と近代的国家体制の確立という過程の中で「世論」が誕生した経緯についてはすでに述べたが、日本においてもその状況は変わらない。その意味で1868年発布の「五箇条の誓文」第一条の一文は「世論」の誕生に関して極めて象徴的意味を持っている。「広く会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ」。「公論」とは言うまでもなく「公議輿論」の短縮形である。

こうして江戸末期から明治維新にかけて出現した「輿論」は、最初は比較的上層部の意見を代表するものであったが、その後の大正デモクラシーを経て昭和、戦後と徐々に政治・社会の重要な諸問題を左右する市民の声としての「輿論」へと成長していったのである。そしてすでに明らかなように、この間使用されたのは主として「世論」ではなく「輿論」であった。

では一体今日一般に「世論」が「ヨロン」と読まれ、使用されるようになった経緯は何か。本来は「輿論」は「ヨロン」、「世論」は「セロン」と読まれるべきははずのものであった。前章に述べたごとく戦前の古い辞典においては、ほとんどが「ヨロン」は「輿論」を採録している。「世論」が「輿論」と並んで記載されるようになったのは、主として戦後になってからのことといっていよい。その後しばらくの間「輿論」と「世論」(時に「与論」)が辞書に併記され、一般にも併用される期間が続くのだが、やがては「世論」が「輿論」に代わって主流を占めることとなった。その最大の理由は「輿論」の「輿」が当用漢字として採用されなかったという事実によっている。当初「輿論」の代用として「民論」、「公論」等の使用も考えられたが定着せず、結果としては耳慣れた「輿論」という言葉に従って「世論」を「ヨロン」と読む傾向が一般化し、今日に至ったものと考えられる。

3. 世論調査の起源

世界の民主主義の発展に多大の貢献をしたとされるイギリスの政治学者J.ブライスは世論に基づく理想の政治に期待を寄せながら、また一方で1888年次のようにも述べている。「世論による政治の明らかな弱点は、その世論を確かめるのが困難であることだ」。世論による政治が理想の政治であるか否かは別の問題として、今日世論の動向を知る上での「世論調査」の果たす役割の有効性については衆目の一致するところであろう。

この世論調査は英語で Public Opinion Poll (Survey or Research) と呼ばれるものであるが、それが生まれ発達したのは、あたかもブライ스가世論による理想の政治を夢見た19世紀後半から、特に20世紀前半のアメリカにおいてであった。その原形となったのは、雑誌・新聞などの読者調査や、一般消費者の意見や嗜好などを調べる一種の市場調査(Market Research)の方法論を、特にアメリカの民主主義にとって決定的意義を持つ大統領選を始めとする種々の選挙結果の予測に適用したものであった。英語には「世論の動向；風向き」を意味する a straw in the wind という表現があるが、アメリカでは早くから straw vote とい

われる模擬投票による選挙結果予測が行なわれており、市場調査の方法論を得てこれが今日の世論調査のもととなったのである。

これに新たな視点を導入、近代的世論調査の道を拓いたのはギャラップ調査で有名なジョージ・ギャラップである。ギャラップは1935年に「アメリカ世論調査所」(American Institute of Public Opinion)を設立、翌36年の大統領選にはF.D.ルーズベルトの勝利を予想、的中させて社会の注目を集めることになった。ギャラップの調査は、この分野で先行していたLiterary Digest社が200万人以上にも及ぶ調査から、得票率43%対57%で対立候補の有利を予想したのに対し、わずか2000人のサンプル調査により56%（実際は63%）とルーズベルトの勝利を予測、的中させたその方法論と精度とにおいて画期的なものであった。こうして1936年は近代的な意味での世論調査元年として後世に記憶され、この年以後世論調査は急速に世界に広がってゆくことになったのである。

日本において始めて世論調査が行なわれたのは第二次世界大戦後のことである。昭和20年10月、毎日新聞は「民主主義日本の基底は輿（世）論の尊重にあり……」との観点に立ち、ギャラップ調査の方法論を参考に「知事公選」の問題に関して始めて全国規模の世論調査を実施したとされている。

こうして発達し、今日方法論的にもまたコンピューターの使用によるデーター処理の点からも、精緻をきわめた世論調査が世論の動向を知るための有効な手段であることは、一般の認めるところである。しかし、政治が世論を尊重するのは当然としても、また一方では為政者が定見なく世論に迎合追従し、それに引きずり回される危険性も否定しがたい。世論調査に関してW.チャーチルは次のような興味深い言葉を残している。

ギャラップ調査の気まぐれな雰囲気の中にいるほど危険なことはない。それはあたかも休みなく脈拍と体温とを計って一喜一憂しているようなものである。⁽⁹⁾

4. 世論のかかえる諸問題

以上言葉の意味とその歴史にそくしながら「世論」誕生とその発展の経緯を概観してきた。繰り返して述べたように「世論」はヨーロッパにおいては特にフランス革命やイギリスにおける一連の市民革命の時代、日本においては幕末から明治維新にかけて、封建体制の崩壊と近代市民社会成立過程の中に生まれ成長をとげたものであった。以後今日に至る間、世界の主たる近代国家において民主主義の確立と、その発展に「世論」がいかに大きな役割を果たしたかは誰れの目にも明らかな歴史的事実といえる。極言すれば「世論」の成長こそは民主主義の発展であった。しかしまた一方では、この民主主義を支える「世論」とそのあり方に、特にこの「世論」を正義としそれを絶対視する風潮に対して、各方面から様々に警鐘が鳴らされ問題が提起されてきたことも事実である。

「世論」の提起する最大の問題のひとつは、昭和30年代わが国において物議を醸した福田

恆存氏の言葉を借りれば「大衆は信じうるか」という表現に集約される、「世論」の担い手としての大衆そのものの在り方に関わる問題である。18世紀封建社会崩壊の過程で「群衆」から「公衆；大衆」が生まれ、その公衆・大衆の「世論」が近代市民社会成立の推進力となった、と指摘したのはフランスの社会学者G.タルドであるが、福田氏はその「大衆」のうちに⁽¹⁰⁾私拭しがたい「群衆性」を看破し次のように述べている。

……私は大衆を信じるなどとは言へない。譯の解らぬものだからである。大衆は意志を持たない。個人個人に意思はあつても、その總和といふものはありえない。もちろん、ある事柄に關して共通の意思といふものはあり、指導者はそれを抽出し表明することが出来るであらう。そこまではよいが、一たびそれを推進しはじめると、大衆の中の個人は必ず一人一人脱落してゆくだらう。……しかも、それは意思をもたないのに、自然のやうに強い力をもっている。そしてその力は必ずしも善意に、あるいは建設的に働くとは限らない。⁽¹¹⁾

端的に言えば福田氏の言葉は、個人の意思が欠落した大衆そのものの性質に内在する無定見とその無定見の暴走する危険性を指摘したものであるが、歴史や文学のうちにこうしたいくつかの例を認めるのはそう困難なことではない。たとえばW.シェイクスピアが史劇の傑作『ジュリアス・シーザー』のモチーフのひとつとして、群衆という名の怪物の無定見とその暴走する様を見事に描き出しているのは周知の事実であろう。またフランスの小説家アナトール・フランスは、フランス革命を題材にした『神々は渴く』(1912)において、人民という名の神々が血に飢えて繰り返す殺戮のさまを極めてリアルに描き出している。こうした大衆の無定見を題材とし、あるいはそれに言及した例は他にも枚挙にいとまがないが、⁽¹²⁾興味深いのは「世論」抬頭の18世紀、すでに百科全書派として名高いディドロが『世論の無定見について』という短編を著わしていることであろう。その中でディドロは、群衆を「かずかずの石頭と毒舌を持った下等な動物」としたうえで、次のように警告している。

われわれを裁き、その体面を掌中に握り、われわれを天の高みに上げたかと思うと、泥の中を引きずりまわす、あの愚かな群衆の実体をよく見すえたまえ。⁽¹³⁾

こうして猛威を振るう群衆とその「世論」に対する当時のパリの人々の反応を、ディドロと同時代のジャンヌ・ローラン夫人はまた次のようにも記している。「弱者は世論に怯え、愚者は拒否し、賢者は判断し、達者な者はこれを左右する」。さらにはナポレオンもこうした世論の専横に大いに神経をとがらせ、「世論に従えばすべては容易である。この世を支配しているのは世論だ」とも述べているが、かくまで力を持つにいたった世論をやがて達者な為政者が左右・操作することに思い至ったのは自然な成り行きと言うべきであろう。

世論操作の典型は、ヒットラーによるファシズム、ナチの独裁政治である。ヒットラーは

『我が闘争』において「大多数の民衆は性質も、ものの考え方も極めて女性的であり、冷静な理性よりも感情に動かされ易い」として、この大衆の感情、世論を操作することが政治家にとっていかに重要なことかを執拗に説いている。彼は新聞の読者を（1）読んだものすべてを信じる層（2）いかなる報道も信じない層（3）批評的に検討し自己の判断を下す層の3種類に分類し、絶対多数の大衆は第一層に属するとし、たうえで次のように断言している。

国家は絶えず注意を払いながら新聞を監視し、言論の自由などという寝言に瞞されてはならない。というよりもむしろ……どこまでも新聞を利用しなければならない。⁽¹⁴⁾

こうしてヒットラーが定見なく付和雷同する大衆なるものの性質を鋭く見抜き、世論の操作と大衆の洗脳によってナチの一大帝国を築こうとし、その試みがいかなる悲劇をもたらしたかは、なお人々の記憶に新しい。

世論の操作によるファシズムの対極にあるもう一つの危険性は、民主主義制度下における世論絶対視の幻想である。アメリカのジャーナリスト、W.リップマンはその名著『世論』（1922）において、大衆心理がいかに形成されるかを分析し、「世論」万能のデモクラシーの概念に強い警告を発している。⁽¹⁵⁾「巨大な力を持った世論は、重大な局面においてしばしば致命的な誤りをおかしてきたことも事実である」。

こうしたリップマンの告発にもかかわらず、デモクラシーの名のもとに肥大化し続ける世論を「匿名の権威」（Anonymous Authority）と呼んだのは、アメリカの社会心理学者 E. フロムであった。フロムは『正気の社会』（1955）において、「世論」を20世紀半ばにおいて加速度的に力を持つに至った「匿名の目に見えない、疎外された権威」のひとつとして規定し、次のように分析している。「匿名の権威のメカニズムは同調である。私は同調を強いられ、他と相違してはみ出すこともできないので、ほかの誰かがすることをしなくてはならない」。⁽¹⁶⁾フロムによれば、実態のないこの匿名の権威への反抗は困難であり、残るのはそれに盲目的服従を強いられる大衆のみということになる。

こうして個としての自律性を失い、精神的には「匿名の権威」への追従に終始する一般大衆が、デモクラシーの名のもとに「世論」を正義の盾として、政治を左右する力となったとき、その至る先は明らかであろう。こうした「世論」絶対化の風潮にたいして早くから危惧を表明していたのは、フランスの政治学者 A. トックヴルであった。彼はすでに19世紀前半、無条件な「世論」の崇拝がやがては衆愚政治を招来する危険性を指摘して、それを「数による専制」（Tyranny of the Majority）と呼んだのである。⁽¹⁷⁾

たしかに民主主義成立とその発展において「世論」の果たした役割の大きさには計り知れないものがある。概念としても実体としても「世論」がなければ、民主主義社会の今日はいえなないといってもよい。しかし、「世論」を善に機能する力として考えるためには、その「世論」の担い手である市民・大衆の多数が賢明ならば、という条件が付くのであって、もしこれが愚昧ならばデモクラシーはたえず衆愚政治、オクロクラシーに墜する危険性をはらんで

いるのである。「世論」の抑圧も容認されえないが、また「匿名の権威としての世論」を万事において錦の御旗として、それを絶対視する今日の風潮も問い直す必要があるものと思われる。要は市民一人一人が確固として個の言葉・意思を持ち、同時にまた常に自らの意見が間違っているかもしれないという自省の念を手放さないことであろう。結局のところ「世論」の問題は、その担い手である市民個人個人の良識・自覚・理性の問題へと還元される。かつてアメリカ第32代大統領 F. ルーズベルトは次のように述べたことがある。「一国の政治は、それを支える世論以上のものではありえない」。⁽¹⁸⁾

注

- (1) 『文藝春秋』(1990年7月号)
- (2) 「知識人よ、権力から逃避するな」(『中央公論』, 1990年6月号)。なお西部氏にはこのほかにも「世論」に言及した最近のいくつかの論文がある。例えば「民主主義を破壊する第一権力＝マスコミ」(『中央公論』, 1989年9月号), 「内戦状態に入る民主主義」(『中央公論』, 1990年2月号)。
- (3) ルソー『社会契約論』(中央公論社—世界の名著, 1971年), p.344.
- (4) ルソー『エミール』(同上), p.470.
- (5) 『啓蒙時代』(白水社—文庫クセジュ, 1981年), p.100.
- (6) 司馬遼太郎『歴史の中の日本』(中央公論社, 1974年), pp.174-175.
- (7) 福沢諭吉『福翁自伝』(岩波文庫, 1988年), p.183. 傍点筆者。
- (8) 田辺太一『幕末外交談』(平凡社—東洋文庫, 1982年), p.18. 傍点筆者。
- (9) W.チャーチル, 1941年9月30日 the House of Commons (下院)におけるスピーチ。
- (10) G.タルド『世論と群衆』(刀江書院, 1928年)。
- (11) 福田恆存「大衆は信じるか」, 『福田恆存評論集—7』(新潮社, 1967年), pp.179-184.
- (12) 本稿末[参考資料—「世論」の華詩集]参照。
- (13) デイドロ「世論の無定見について」(筑摩書房—世界文学大系16, 1960年)。
- (14) ヒットラー『我が闘争』(第一書房, 1941年), p.112, pp.147-148.
- (15) アメリカのジャーナリスト W.リップマンは、大衆心理がいかにして形成されるかを出発点として、人間と環境の基本的な関係をイメージの観点から分析した名著『世論』(1922)を著わしている。翻訳としては岩波文庫より『世論』上下2巻がある。
- (16) E.フロム『正気の世界』(社会思想社, 1988年), pp.176-189.
- (17) A.トックヴィル『米国の民主政治』(研進社, 1949年)。原典は1930年に書かれたもので、行き過ぎた民主主義のうちに衆愚政治の危険性を指摘した著作として名高い。
- (18) F.D.ルーズベルト, 1936年1月8日 Washington, D.C.におけるスピーチ。

参考資料—「世論」の華詩集

- (1) 人の数だけ多くの意見がある。(西欧の諺)

——フランス——

- (2) 世論はじつに世界の女王であり、理性でこれに対抗しようとすれば死刑に処せられる。(ヴォルテール —思想家)
- (3) 一つの人民の世論はその国家構造から生れる。(ルソー —思想家)

- (4) 世論によって統治しようとするならば、まずそれを踏みつけることから始めよ。(同上)
- (5) 群衆は善においても悪においても、賛美者であったり、愚かな非難者であったりする。(ディトロ —思想家)
- (6) 群衆の言うことに耳を傾けたまえ。しかしけっしてかれらを信じてはならない。(同上)
- (7) 世論は君主がたえず気をくばらなければならない温度計のようなものである。(ナポレオン)
- (8) 肉体に意識があるごとく、大衆に世論がある。(G.タルド —社会学者)
- (9) 沸騰する世論は、いかなる政府といえどもこれを拒み難く、その脅威にたいしてはいかに理性ある個人といえども戦慄して度を失う。(同上)
- (10) 世論はある時は流行の新学説に熱中して旧来の思想制度を攻撃し、またある時は慣習に縛られて合理的改革を排斥し、あるいはこれに伝統的な装いを施して、偽善の仮面をかぶろうとする。(同上)
- (11) 男はいかにして世論と戦うかを、女はいかにしてそれに屈すべきかを知らねばならない。(スタール夫人 —小説家)

——イギリス——

- (12) 言論の自由を殺すことは、真理を殺すことである。(ミルトン —詩人)
- (13) もし全人類の中でただ一人異なった意見のものがいたとしても、我々がその意見を黙殺することは正当化され得ない。それはかりにその一人の人物が絶対的権力者だとしても、残りの全人類を無視できないのと同じことだ。(J.S.ミル —思想家)
- (14) 気まぐれで、わがまま勝手に、思わせぶりで、浮気っぽい世論。(E.バーク —思想家)
- (15) あるものは、朝褒めたたえたものを、夜には避難する。(A.ポープ —詩人)
- (16) 政府は世論を土台としてのみ存在する。このことは、最も自由で支持を得た政府のみならず、最も独裁的軍事政権においても変わらない。(D.ヒューム —哲学者)
- (17) 世論は政治権力の不正に対する唯一のチェック機能である。(J.ベンサム —哲学者)
- (18) 世論は老婦人のようなものである。だから、ぶつぶつ言いたいままにさせておくがいい。(T.カーライル —歴史家)
- (19) 世論は常に法に先んじる。(J.ゴールズワージー —小説家)
- (20) 世論を作り上げているものは、愚かさ、弱さ、偏見、好悪の感情、頑迷、そして新聞記事である。(Sir R.ピエール —政治家)
- (21) 大衆は牛を飼うより安上りだとして肉やミルクを買うごとくに、出来合の世論に群がる。(S.バトラー —小説家)
- (22) 世論は結局のところ知性ではなく、感情によって決定される。(H.スペンサー —哲学者)
- (23) 普通であることに満足できない人々の不満を故意にかき立てる、卑俗で意地悪い匿名の専制君主 —世論。(W.R.イング —神学者)
- (24) 今日のマス・デモクラシーの指導者たちは、世論を政治に反映させることよりも、世論の形成、操作ばかりに夢中になっている。(E.H.カー —政治学者)
- (25) 世論はあらゆる種類の観念、信仰、空想、偏見、希望などのに入りまじった集合体であり、混沌として支離滅裂、かつ無定見で日々、毎週変化する。(J.ブライス —政治学者)
- (26) 世論はそれに関心でいる人々に対してよりも、恐れている人々に対してより暴虐的である。(B.ラッセル —哲学者)
- (27) 世論に対して真に関心でいることは、幸福の力であり、その源泉でもある。(同上)
- (28) 世論を恐れることは、他の恐怖と同様、人の心を威圧し、その成長を妨げる。これを恐れている間は、いかようにも大事は成し得ないし、真の幸福にとって不可欠な精神の自由を得ることも不可能である。(同上)

——ドイツ 他——

- (29) 世論を無視することは、道徳を無視することと同じく大変危険である。(メッテルニッヒ — オーストリアの宰相)
- (30) 世論に善悪があるのは事実として、それを見分けるのが識者の仕事である。(ヘーゲル — 哲学者)
- (31) 世論は時計の振り子のようなものである。左右に揺れ、やがて中心で止まる。(ショーペンハウエル — 哲学者)

——アメリカ——

- (32) アメリカには世論に抗しうるいかなるグループも存在しない。(F. ルーズベルト)
- (33) 善悪いずれにもせよ、世論を無視するのは安全とは言えない。(A. リンカーン)
- (34) 世論が味方すればすべてはうまく行くが、それを失えば何事も成功を望みえない。(同上)
- (35) すべての人の意見が同じなのはよくない。面白いのはそれぞれの意見が違うからだ。(マーク・トウェイン — 小説家)
- (36) 問題なのは世論を完全に無視するか、それとも盲目的に尊重するかということではない。大切なことは、世論をいつ、またどの程度に考慮に入れるか、ということである。(G. ギャラップ — ジャーナリスト；社会心理学者)
- (37) 世論が物事の真実を正しく、かつ迅速に理解することは期待できない。世論には市民自身の希望や恐怖で、根も葉もない流言を育てあげる傾向が内在している。(W. リップマン — ジャーナリスト)

——日本——

- (39) 世論は決して知的な力ではない。それは感情的、かつ道義的な力ではあるが、それ以上のものではない。(ラフカディオ・ハーン)
- (40) 世に公義輿論と称するものは真実に公義輿論として認むべき場合もあれども、只、名のみにして実を具えざるもの往々にして少なからざるが事し。(福沢諭吉)
- (41) 人民の声は神の声なりとは、此上もなき妄語なり。人民の声はしばしば悪魔の反響たることあり。輿論の中には玉石の雑然たるを見る。(植村正久 — 明治～大正時代の宗教家；評論家)
- (42) 輿論の風潮に乗じて、一時の姑息策を施し、目前の時務を料理するは、小政治家の為す所なり。(同上)
- (43) 一人唱えて万人和す。輿論の声は、要するに、雷同の声なり。(徳富蘇峰)
- (44) 輿論は常に私刑であり、私刑はまた常に娯楽である。たといピストルを用いる代わりに新聞の記事を用いたとしても。(芥川龍之介)
- (45) 世論には形がなく、責任がない。その時の流行によって変わる。しばしば作られもする。いったんブームがはじまるとだれもかれもが便乗するから、とどめがなくなる。(竹山道雄)
- (46) 輿論というものはいつも野心家や煽動家によって悪用される危険を持っている。(田中美知太郎)
- (47) われわれはなお少数者の識見と勇氣に社会の安全と輿論の発達とを委託しなければならない。(同上)
- (48) 世論とは新聞やテレビではない。世論とは選挙である。(田中角栄)